

<p>校長室だより</p> <h1 style="text-align: center;">共学共高</h1>	<p>第 32 号</p>	<p>令和4年10月14日発行</p> <p>発行責任者 白梅学園高等学校長 武内 彰</p>
---	-----------------------	---

校内巡回も楽ではない！？

今年度に入り、ここまで対面での教育活動が継続できていることを大変嬉しく思う。毎日、校内には生徒たちの姿がある。このことは、昨年度までは決して当たり前のことではなかった。covid-19 感染拡大防止のために、全校オンライン授業を実施したのは本校だけではなかったはずだ。幸いにして今年度は、毎日生徒たちが登校し、先生と顔を合わせての授業、部活動、学校行事、生徒会・委員会活動等が実施できている。私も普段はバドミントン部活動があるので、放課後の巡回は練習のない日に限られるが、中間考査一週間前には練習がなくなるので、毎日放課後の校内を巡回することができる。そのときの様子をお伝えしたい。

「先生、数学わかりますか？」廊下を巡回している私に2年2組の生徒が声をかけてきた。もちろん、私の専門は数学ではない。「うーん、わからないかも知れないなあ。」と返答する。「この問題なのですが・・・」と生徒。見ると、 $\sin \theta$ や $\cos \theta$ が並んでいる式がある。

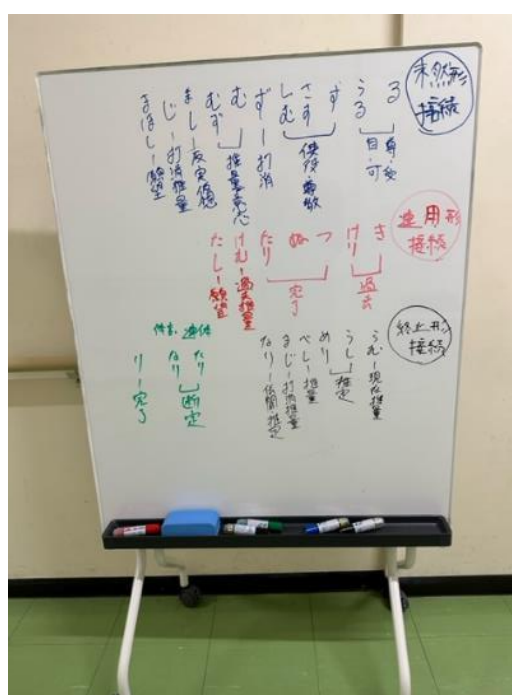
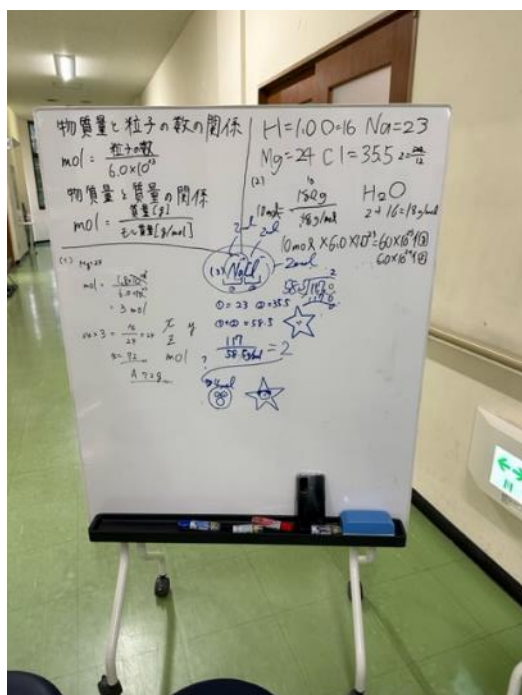
「三角関数か・・・」と私がつぶやく。「とにかく一緒に考えてみよう。」と彼女に言って、二人で教室内の電子ボードに向かう。私「ここここはこうやって・・・できるよね。」生徒「そこまではいいのですが・・・」私「あれ、ここの α はどうすればいいんだろう？」生徒「似たような問題では、こうやって x 軸と y 軸上に単位円を描いて・・・」私「あっそうだね。そういう風に考えるとこの問題では・・・こうなるのかな。」生徒「あっ、わかりました。答えを確認してみます・・・合っています。ありがとうございました。」私は、安どして教室を立ち去るのであった。校内を巡回するのも一定の緊張感があるではないか。

1年2組の教室では、電子ボードの前に3人の生徒が集まって、化学の問題を考えている。もちろん、私の専門は化学ではない。私「何をやっているの？」生徒「モル (mol、物質質量) の問題を考えているのです。」私「理解しにくいところですね。」生徒「この問題ですが、どうやって考えればいいか・・・」私「原子量や分子量が与えられているときには、それにグラム (g) 単位をつけたものが 1 mol の質量になるのではなかった？それを基にして求められている量を x とおいて、比例式を立てればいいのか？」生徒「あーわかりました。」担当の先生の教え方と異なっていたら困るかな・・・と心の中でつぶやいてその場を立ち去る。

私には、さらなる試練が待っていた。別の日に1年生が生活している H 棟を巡回していると、いつも数学の K 先生が2階の教員室前で生徒たちの質問対応にあたっている。いつ

も熱心に対応されているなどと思いながら、その場を通り過ぎると、しばらくして3人の生徒たちが私の背中を追いかけてくる。「校長先生、この問題のここがよくわからないのです。どうして陽イオンと陰イオンを合計すると4molになるのか・・・」問題集のある問題の枝間のうち、最後の1問のようだ。K先生は数学が専門であるにもかかわらず、対応していたのだ。しつこいようだが、もちろん、私も化学は専門ではない。彼女たちがひっかかっていたのは、塩化ナトリウム NaCl が 2mol あるときに、陽イオンである Na^+ が 2mol あり、陰イオンである Cl^- も 2mol あり、イオンの合計が 4mol となることにあるようだった。かなりの時間をかけたが、十分に納得してもらえなかった様子だ。力不足を痛感させられる。定期考査前に校内を巡回する緊張感がますます増大してきた。

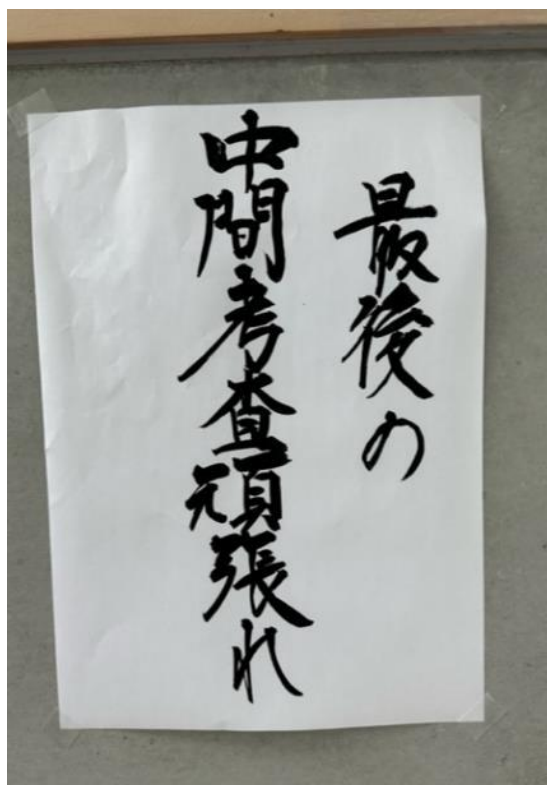
しかしながら、うまく説明できないとしても、生徒対応をするのは楽しいことだ。わからなければ一緒に悩めばよい。H棟の廊下に置かれたミニホワイトボードには、古文の助動詞の活用がずらりと書かれている。生徒たちが確認するために記入したものだが、私にはさっぱりだ。遙か彼方の記憶が蘇ることもない。ただ、作品の内容は断片的に記憶されている。行間を読解できた時の喜びもかすかに残っている気がする。



高校生、今しかできない学びがある。その学びのすべてが将来において実用的かと問われれば、必ずしも首肯できない。しかし、さまざまな教科・科目の学びを通して身に付けた「ものの見方・考え方」は将来に生きてくるはずだ。いつも学校見学会や学校説明会で中学生・保護者のお話していることだが、「教養の土台の上に高い専門性を積み重ねた人が、クリエイティブなものを創り出していく存在となる」と考えている。学びが苦しいと感じることがあるかもしれない。でも、学び続けていくとそれが当たり前のこととなり、喜びになってい

くこともあるはずだ。一人だけではない、みんなで学んでいくことも楽しみの一つになるのかもしれない。

今日も本校では、教室内、カウンター席、多目的ホール、自習室で学ぶ生徒たちの姿がある。



(共学共高とは：本校のディプロマポリシー（育てたい生徒像）の一つで、「共に学び、共に高め合う」生徒の姿を表す)